

今月のポイント

- 人をつなぐのは「知識」や「技術」ではなく「姿勢」
- 「信頼+ネットワーク+お互い様」を常に意識できるか
- 健康づくりを通じた地域づくりの基盤となるソーシャル・キャピタル醸成事業という考え方



佐々木亮平 (ささき・りょうへい)

岩手医科大学
衛生学公衆衛生学講座
●連絡先：〒028-3694
岩手県紫波郡矢巾町西徳田 2-1-1
19-651-5111 (内線 5775)



岩室紳也 (いむろ・しんや)

ヘルスプロモーション推進センター
(オフィスいわむろ)
●連絡先：http://iwamuro.jp/

第2回

人と人をつなげようとする「姿勢」が重要

自主グループ化とソーシャル・キャピタル醸成事業の違い

陸前高田市の健康運動サークル「たかた☆ハッピートゥウェーヴ！」(会員30名、平均年齢68歳、以下ハッピー)が今年の「希望郷いわて国体」デモンストレーションスポーツにおけるエアロビク競技で国体特別賞を受賞しました(図)。同サークルは、東日本大震災前に保健推進員の自主グループとして結成されて以来、市内を中心に玄米ニギニギ体操を手段として活動を続けて

きたのです。

ハッピー誕生までのプロセスは、まさしくソーシャル・キャピタル醸成事業そのものでした。こう書くとソーシャル・キャピタル醸成事業＝自主グループ化と勘違いされる人がいるかもしれませんが、それはとんでもない誤解です。その理由は後で述べます。今回は、行政側の戦略的な仕掛けに加え、自分たちも幾多の困難とぶつかり、乗り越えられてきたハッピーさんたちの活動の軌跡からソーシャル・キャピタル醸成事業について考えていきたいと思います。

ソーシャル・キャピタル醸成事業に求められる「信頼+ネットワーク+お互い様」

保健推進員活動は全国的な制度としてあり、どの自治体でも事業として実施しなければなりません。しかし、「今年は何をしよう」「何を一緒にしてもらおう」と考え、事業を「こなす脳」になっていないでしょうか。同市でも東日本大震災の数年前までは、積極的な活動は展開できていなかったのが現状でした。ではなぜその後、自主

グループの設立にまで至ったのか。当時担当だった佐々木自身の関わりも含めて紐解いていきたいと思います(表)。

とにかく「信頼」を「つなぐ」「つなげる」

ソーシャル・キャピタル醸成事業で一番大事なことは、きちんとした理念に基づく取り組みをすることです。震災前、保健推進員の研修会を開くに当たって、佐々木は

その場を人と人、住民同士が出会う機会であると自分に言い聞かせ続けました。まずは町別に交流を深めながら、人を知り、仲間がいることで「信頼」を育み、丁寧な「ネットワーク」づくりを通して一緒にできるかもしれないという雰囲気をつくれるよう、根気よく仕掛け続けました。次はどうしたらよいのか? そのためには次回この時期に集まろう……と話し合い、その都度「何のために」を確認し続けました。気がつけば前年度までの10倍を超える話し合いの機会を持つことになりました。

出会うより、話すより「元気も「お互い様」に

09(平成21)年に保健推進員の集まりが自主グループに移行してからは、県立高田病院院長の石木幹人先生(当時)をはじめ病院の方々が地域で行っていた健康講演会とのタイアップを仕掛けたことで、活動を続けていく上での大きな自信、力につながりました。医療機関にとって市民と一緒に活動することで地域への浸透度が確実に上がる一方で、住民も先生方と一緒に地域に出ることで、健康づくりの一翼を担っているという意識がより強固なものになったのに加え、それまで以上に、地域の人と出会い、話すことでお互いが元気になり、このような場があることでやりがいや生きがいを実感できるという、当初の活動目的を思い起こすことができました。被災後も県立高田病院とハッピーの皆さんが被災前と変わらず市内を一緒に歩き、地域の元気を取り戻していくというプロセスを目の当たり

図 デモンストレーションスポーツ国体特別賞受賞記念写真



表 陸前高田市における保健推進員としての活動状況と自主グループ後の活動状況（概略）

陸前高田市保健推進員			健康運動サークル たかた☆ハッピー！ウェーブ！		ソーシャル・キャピタル (信頼・お互い様・ネットワー ク) 醸成のポイント 〔工夫したこと 失敗したこと つらいこと〕
保健推進員 活動	H19年度 【2007】	H20年度 【2008】	自主グループ 活動	H21年度 【2009】	
研修会	4回 (251名)	6回 (401名)	定例会・練習	23回 (794名)	・既存事業を手段に ・まず会う ・町別交流 ・仕掛け続ける根気
話し合い	22回 (518名)	28回 (967名)	県立高田病院 健康講演会	11回 (523名)	・月1～2回顔を合わせる ・本音で語り合う ・何のためにを共有し続ける ・他機関からの後押しで自信
ステージ 発表	3回 (1,900名)	6回 (1,956名)	ステージ発表	11回 (4,075名)	・共通目標で団結力向上 ・実施後の自己肯定感のアップ ・自己実現、楽しさの経験 ・準備と仕掛けの調整
市と協働の 教室	56回 (1,842名)	67回 (1,810名)	市と協働の 教室	14回 (448名)	・既存事業と連携、橋渡し ・やらなければならない事 業から、やりたい事業へ
独自の教室	124回 (2,788名)	194回 (3,564名)	独自の教室	17回 (272名)	・つながりで信頼感アップ ・自身の役割、やりがい発見 ・予算がなくてもお互い様
延回数・ 人数	183回 (延6,530名)	267回 (延7,330名)	延回数・人数	76回※ (延6,112名)	※H21年度は自主グループ だけの実績で、別途保健推 進員も活動している

にし、とても心強く感じました。
住民主体の健康づくり活動を進めるのが
難しいのは、計画や事業、予算を持つてい

る行政の担当部署が住民と協働し、住民に
「させる」のではなく、「お互い様」の気持
ちで進めていくことができないからで

がいます。しかしこれまでは、人
に依存した事業の組み立ては普遍化できな
いとして、評価せず切り捨ててこなかった
でしょうか。しかし、「信頼」「お互い様」
「ネットワーク」という視点で考えると、「誰
がキーパーソンか」が問題なのではなく、
醸成されたソーシャル・キャピタルがキ
パーソンを上手に使っていると理解すれば
いいのです。

ひとたびソーシャル・キャピタルが醸成
されると、いろんな場面で生きてきます。
震災を機にハッピーは解散の危機に直面
しました。しかし、それまでの絆（きずな

十ほだし）があつたからこそ、佐々木は被
災16日目に体操に必要な道具セットを代表
の松野サカエさんへ届け、体操を手段にあ
の時期を乗り切ることができました³⁾。保
健推進員時代から指導されていた健康運動
指導士の藤野恵美先生が各避難所を歩きな
がら、住民の皆さんの生活リズムをつくつ
たり、石木先生が玄米ニギニギ体操を市内
で実践していろいろと後押ししてくれたり、同
体操考案者の故鈴木正成先生をはじめ全国
の皆さんが支えてくれたことで、ハッピー
さんたちは自分たちができることを続けよ
うと決断するに至りました。

震災後、専門的な支援チームが少しずつ
撤退していく中、地元ハッピーさんだか
らこそそのつよみ、よさを生かし⁴⁾、専門職
ではないからこそ言える（癒える）一言で、
住民だけではなく、実践者であるハッピー
さん自身の癒やしや元気にもつながってい
ました。佐々木や岩室は、定期的にハッピー
定例会に出席し、ハッピーさんの活動がい
かに地域の健康を支え、復興のための力に
なっているか、ソーシャル・キャピタルの
醸成を担っているかを専門的な、市外部の
立場から語り、応援し続けています。

格差を克服するための ソーシャル・キャピタル

震災後は、震災前よりも経済的な格差、
健康面での格差が少しずつ顕著になってき
ました。これはハッピーさんたちも例外で
はありませんでした。ですが、体操や集ま
る場を通じて、お互いにすぐには解消でき
ない格差と向き合いながら、正しい答えや
即効性のある回答を出そうとするのではな
く、それぞれの幸せや生活を分かり合おう
とし、実践を続けておられます⁵⁾。

ソーシャル・キャピタルが醸成されるこ
とで、当初は予期し得なかった効果が生ま

はないでしょうか。住民は何ができるの
か、行政としてできることは何なのか、限
られた予算と時間の中でお互い様の気持ち
をベースに繰り返しやりとりを積み重ねる
ことで「信頼」が生まれ、元気も含めた「お
互い様」が本当のものになっていきます。
これからの事業担当者はソーシャル・キャ
ピタル醸成事業という「脳」を常に意識し
ながら、ノルマとしての健康教室事業では
なく、住民が楽しいと感じ、元気になれる
ような事業を自然な流れの中で展開できる
よう、住民と丁寧に向き合い、関わり続け
ることが求められています。

担当を離れても切れないの がソーシャル・キャピタル

市民活動が円滑に継続されるためにはさ
まざまな支援が必要です。ハッピーさんの
場合は基本体操のDVD制作など、折に付
けて「できる人が、できることを」支援す
る必要が生まれ、担当だけで対応できない
ことについて、2010（平成22）年に佐々
木が担当から外れた後も、支援をし続けま
した。皆さんの周りでも地域づくり、ソ
シャル・キャピタル醸成事業が成功した事
例を見ると、間違いなくキーパーソン

れます。大事なことは、日常のどんな事業
の中にもソーシャル・キャピタル醸成事業
は存在していることを意識し、仕掛け続け
ることです。そのことが健康づくりを通じ
た地域づくりにつながり、いまある格差を
根本的に解消できずとも、向き合い続ける
中で克服していく効果や効用が、気が付け
ば後から付いてくるものと信じています。
このことをいままハッピーさんの姿、姿勢
から学び続けています。
読者の皆さんの近くにも、きっとそれぞ
れのハッピーさんがおられるはずですよ。
ぜひ、一緒につながり続けていきましょう。

文 献

- 1) 佐々木亮平, 岩室紳也. 隔月連載 東日本大震災で求め
られている公衆衛生活動とは 少しずつ見えてきたポ
ピュレーションアプローチの成果 第6回. 月刊地域
保健. 2015, vol.46, no.2, p.47-53.
- 2) 佐々木亮平. 「復旧」ではなく「復興」へ～復興へ向
かう陸前高田市の今・第五報～. 月刊地域保
健. 2011, vol.42, no.9, p.54-61.
- 3) 佐々木亮平, 岩室紳也. 災害を支える公衆衛生ネット
ワーク 東日本大震災からの復旧、復興に学ぶ・9 こ
ころのケアとは ポピュレーションアプローチの視点
から. 月刊公衆衛生. 2012, vol.76, no.12, p.61-66.
- 4) 佐々木亮平. 専門支援チーム撤退がもたらす新たな力
～復興へ向かう陸前高田市の今・第七報～. 月刊地域
保健. 2011, vol.42, no.11, p.60-67.
- 5) 佐々木亮平, 岩室紳也. 未来図を描く公衆衛生活動 in
陸前高田③ 新たに生まれている「格差」と向き合う
ために. 月刊公衆衛生.
2013, vol.77, no.12, p.1001-1005.